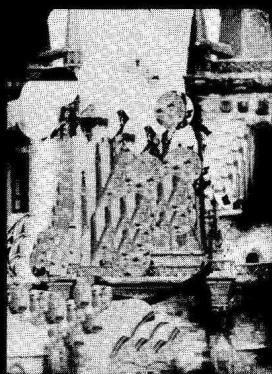




# 異国の街角で

五木寛之



文藝春秋

異国の街角で

限定・非売品

1975年8月1日発行

著者／五木寛之

発行者／樫原雅春

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表) 03-265-1211

印刷所／凸版印刷株式会社

製本／大冢製本印刷株式会社

© 1975 Hiroyuki Itsuki

Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

異  
国  
の  
街  
角  
で

装幀／養老正也

レタリング／原アト・アクチュアル

表紙カット／エドワルド・ムンク「叫び」より

写真／飯窪敏彦（一九七二年八月ブラハ市内にて）

# I

ブラハの空港に着いたのは午後だった。私は若い友人と二人で、いわゆる自由主義国家圏から飛行機でやってきたのである。私たちが車で市内のホテルへ向かう途中、どこかで遠い砲声のような雷の音がひびくと、不意にあたりの気配が変わった。風が強くなり、空は東のほうからたちまち暗くなった。なにか敵軍に占領された直後の街、といった感じがした。

タクシーはソ連製のヴォルガではなく、古いチェコ製のシュコダだった。運転手は灰色の舗装道路を、かなりの速度でとぼした。市内に入り、ブルタヴァ川を越えて左折し、川沿いの荒

れた工場地帯を抜けて樹木の多い坂道にさしかかったあたりで、車のラジオからふと一瞬、アコーディオンの旋律がきこえた。華やかなくせにどこかさびしいその音色は、まぎれもなくスラブの音だった。私たちがつい数時間前までいた西ヨーロッパではない、べつな世界の気配がそこにあった。

東へきたんだな、という強い感慨を、突然そのアコーディオンの音は私の中に呼びさましたのである。それはなまなましく、そして鮮かな感覚だった。チェコスロヴァキアの現在おかれている立場、そして未来もそうであろうと思われるソヴェート・ロシアとの切っても切れないきずなを、その民謡風のメロディーは私に強く感じさせたのだ。いわゆる雪どけの季節にはじめてこの国を訪れて、チェコの人々がいかに西側の世界、ことにアメリカに対して強い興味と幻想を抱いていたかを知らされた私にとって、そのカーラジオの音楽は、あたかも一つの予告のように深く胸にこたえた。今にも降りだしそうな暗い空の下で、豊かな樹木の葉の群がりか激しくひるがえり、タクシーは車体をきしませながらきついカーヴの坂道を駆け抜けた。

ホテルは外見だけは近代的な、味もそっけもない高層ビルだった。出発前に予約をすませ、料金もすべて払い込み済みにもかかわらず、私と同行の友人は約束通りの部屋をとることがで

きなかった。こういう事はありがちなことで、怒ったところではじまらない。私はそんなトランプに慣れていたし、フロントの接客係のほうでも平気な顔をしていた。社会主義諸国での公式招待者とプライベートな旅行者との立場の違いは、資本主義諸国における資本家と労働者のそれに似ていて、どこことなくユーモラスな感じさえある。そのことを本当に知るためにも、私たちは公式招待客としてではなく、自前で東の国々を歩いてみるべきだろう。

ホテルの窓からは、くすんだ古い街並みとポプラの樹、サッカーのコートや煙突などが見え、湿った風が流れこんだ。不意に稲妻が閃くと、やがて雨がきた。白い、みぞれかと思われる光った雨だった。雨はしばらく降り続き、やがて南の空からカーテンを巻き上げるように素早く晴れ間が見えると、たちまち降りやんだ。空気が冷えて気持がよかった。雨上りのブラハの街は洗濯したばかりのシャツのようにくっきりと眺められた。空港からやってくる時の、あのよそよそしい感じは嘘のように消えていた。私たちは服を楽な恰好に着替え、やっと旅行者らしい弾んだ気持を取りもどして街へ出た。

ホテルの前でしばらくタクシーを待った。だが、空車は全くやってこなかった。そこで私た



ちは少し歩き、市電で目抜き通りのヴァーツラフ広場へ出た。私たち二人が大通りを流していると、若い感じのいい青年が五分おき位に近づいてきて声をかけた。彼らは私たち外国人旅行者のドルを、公定のレートよりはるかに有利な条件で交換してやろうと申し出るのである。彼らは皆、片言の日本語で私たちに呼びかけ、終始、紳士的で礼儀正しく、闇ドル買といったいかがわしきはほとんど感じさせなかった。私たちは空港の窓口でほとんど必要以上の額を交換ずみだったので、彼らの友情あふるる申し出を丁重に辞退せざるを得なかった。しかし七、八年前、私をはじめモスクワを訪れた時と、こういった事態がほとんど変っていない事が私を驚かせた。プラハの街も四年前に訪れた時とほとんど外見上の変化を見せておらず、特に目立ったものといえば、広場の正面にそびえている堂々たる国立博物館が工事用の足場ですっかりおわれている事ぐらいのものだった。

あの銃弾の痕も消えてしまうのだな、と私は思った。その建物の壁面には、いたるところにあのワルシャワ条約軍がプラハに進駐した際、戦車が発砲した弾痕が鮮かに残されていたからである。四年後の今、それはようやく消し去られようとしていた。生きた歴史は常にこんな具合に消し去られて行くのだ、と私は考えた。後世に伝えられるのは、魚の骨のような歴史



史のガラだけなのではなからうか。

喉がかわいて何か飲みたくなった。私たちは近くの古風なホテルへビールを飲みにはいって行った。それは私にとって、或る忘れられない思い出のある場所だった。少しずつあたりが暗くなって、ブラハの街がようやく生き返ろうとしている時刻だった。

## II

そのホテルは、スメタナ記念音楽堂とアカシアの緑地帯をはさんで向きあつた場所にあつた。灰色にくすんだ、こぢんまりした建物だった。

道路に面して小さなテラスがあり、黒いタキシードを着たウェイターが白い布を腕にかけて客席の間を歩き回っている。どこか時代にとり残されたような、ぱっとしない雰囲気のホテルの玄関にもテラスにも漂っていた。

私たち二人は、そのテラスの椅子に坐つてビールを飲んだ。ピルゼン産のビールは、今では東京のちよつとしたレストランでも飲むことができるだろう。だが、夕暮れどきのひんやり

とした空気の中で飲むチョコのビールは、妙にも哀しく、懐かしい味わいがあった。

「前にいらした時と今度では、どこかブラハの街の印象に違ったところがありますか」

と、年若い友人が私にたずねた。

「うん」

私は唇の端についたビールの泡を手の甲でぬぐって、緑地帯のアカシアの茂みを眺めやった。

「なんだか随分かわったような気がする」

「どんなところが変わったのか？」と、友人はきいた。私は少し考えてから、なんだか街に活気がなくなったような気がする、と、答えた。

「そうかなあ」

その友人はホテルの前の道路ばたに止めてある車の列を眺めやると、外車が多いですね、と、指さして数えあげた。

「フィアット、ベンツ、アルファ・ロメオ、シトロエン、それにBMW——」

トヨタもあるな、と、私はつけ加えた。外国で外車というのも変なものだが、事実、それらの車はチェコスロヴァキアの立場からすると外車にはちがいない。外交官ナンバーらしきもの

をつけたのもあり、ドイツやイタリアのマークをつけた車もあった。

「さっきヤルタ・ホテルの前でフェラーリが停ってたの見たかい」

私が言った。

「ええ。いったいどんな連中が乗るんでしょう」

「外国からの旅行者じゃないのか」

「タクシーはほとんどヴォルガばかりのようですね。シュコダも少しは見かけるけど」

四年前にこの街にやってきた時、若い連中の間にクラシクな車を走らせるのが大流行していた事を私は思い出した。クラシク・カーといっても、世界の名車といったしるものではない。一九三〇年から四〇年代位の箱型の実用車に手を入れて、オープンにしたり、ボディを鮮かな原色で塗るかえたりした、遊びの車なのだ。

私はそんな古い映画に出てくるようなユーモラスな乗用車に、学生や若い男女がぎゅうぎゅう詰めになって走ってくるのを何度も見かけたものだった。土曜の夜など、ティン・チャーチの前の広場に何十台というオモチャのような車の行列ができていた。若者たちはそれぞれに突飛な服装やメイキャップを競いあって、車の上でギターを鳴らしたり、笛を吹いたり、奇声を



発して跳ねあがりたりしていた。

夜明けのブルタヴァ川の上を、たったひとりだけオープンカーの運転台に坐って走って行く男を見たこともある。彼は山高帽に燕尾服といった風変りな恰好で、長い絹のマフラーをなびかせながら橋を渡って行くのだった。彼は背筋をしゃんとのぼし、両手をまっすぐのぼしてハンドルを握っていた。ブルタヴァ川の下流から昇る朝の光をあびて、その男は青年貴族があたかも決闘へでも出かけて行くかのような生真面目さでもやの中へ消えて行ったのだ。その橋の橋げたに、白いペンキで大きく、*ヘドプチュク!*と書きなぐってあったことを私は憶えている。それはまだワルシヤワ条約軍の戦車のわだちの跡が街のアスファルトに残っている頃で、若い学生たちや、情熱的な市民たちが、その数年前からほうふつとして沸きあがった<sup>へ</sup>雪どけ<sup>の</sup>の昂揚と劇的な挫折の興奮からすっかり醒めきっていない年の夏のことだったのである。

それは一種の馬鹿さわぎのようなものだったのだらう。深夜まであの旧式なエンジンの音を響かせながら、オンボロ車に打ちまたがって街中を駆けめぐる若者たちの表情には、ある種の哀切なデカダンスの匂いが翳<sup>かげ</sup>をおとしていたような気がする。

あの頃はまだこの街にも匂いがあった、と、私は考えた。なにか沸きたつものの残り香のよ  
うな感じが、通りを歩いている若者たちの間に感じる事ができたのだ。そしてヴァーツラフ  
広場の正面にそびえる国立博物館の壁面には、ワルシャワ条約軍の戦車が撃ちこんだ弾の跡が  
無数に残っており、その事件の時に死んだ青年の肖像写真があちこちに見られたものだった。  
私はビールのグラスを掌にはさんだまま、その夏のことを沈んだ気分で思いおこそうとして  
いた。

### III

〈冒険〉というものがある。それは私たちが少年の頃、雑誌や物語の中であい、それを憧れ  
る気持をおさえきれずに、ふと一日か半日の小さな家出旅行を試みたりするところの胸躍る行  
為である。

それは実際には自分の住んでいる町から、ほかの子供達が住む隣接した町への数時間の徒歩  
旅行であったり、また時には立入りが禁止されている河岸の倉庫群への深夜の潜入であったり



する程度のものなのだが、それでも当人にとっては少なからぬ決断と勇気が必要とするものなのだ。

そして私たちは次第に成長し、学生時代を終えて社会人となる過程において、いつしか本当の〈冒険〉などというものは、この世の中に存在しないものなのだということに気づく。それは独りぼっちで太平洋を風と潮流にまかせて横断する行為においてもそうなのである。生命の危険と〈冒険〉とは、必ずしも同じではない。やむなく追い込まれた危険から脱出する戦いは、現実や人生の不条理のあかしではあっても、〈冒険〉とは呼ぶべきではないだろう。〈冒険〉には、どこか老人の胸をもときめかすたぐいの一種の明るさが必要なのである。

このところ、そんな意味での〈冒険〉に、私自身、ながい間めぐり合うことなく生きてきた。生きるための、必要に迫られた危険や賭けや決断といったものだけが、二十歳以後の私の過去を埋めつくしていたように思われるのだ。あの時もし自分がこう動いていたら……と、思い返すたびに顔が一瞬こわばってくるような、そんな記憶もないではない。だが、それを思い出すことは、私にとって苦痛にすぎない。怖れの感覚が同時に爽かな潮風に吹かれるような歓びと共によみがえってくるような、そんな事件はこの二十年間というもの一度も私に訪れてはこな